



第18航空団広報局発行

## 「トモダチ作戦」支援部隊、嘉手納基地へ帰還

第18航空団広報局

東日本大震災被災者を救援する米軍の「トモダチ作戦」に、嘉手納基地から参加した第33救難中隊と第353特殊作戦群が、その任務を終了し帰還しました。

約1ヶ月の救難活動支援後、第33救難中隊は4月4日に嘉手納基地に帰還しました。同中隊は震災の翌日、5機のHH-60 救難ヘリコプターと5つの班で構成される軍人を米国空軍横田基地へ送りました。在日米軍を通じて米国機関に、津波の被害を受けた地域に救助支援を提供する任務を行いました。また同中隊は、米国エネルギー省の専門官をHH-60 機に搭乗させ、福島原発からの放射線量による損害を確認し放出される放射線粒子の塊を追跡する任務に携わりました。HH-60 機のパイロットを務めたジョセフ・アンドレスキー大尉によると、戦時 平時における救難捜索活動や医療搬送を任務とする同救難中隊にとって、今回の災害における任務は、多くのチャレンジを伴う厳しい状況下での作業だったとのことです。陸上自衛隊とも共同で作業にあたり、ヘリコプター運用の支援をするために設けられた陸上自衛隊の着陸地帯や施設を使用したとのことです。「この作戦を支援するために派遣された多くの隊員は、日本の皆さんからの感謝の気持ちを受けました」と、アンドレスキー大尉は述べました。

「燃料補給のためにヘリコプターで着陸した各地や、地元の方々と出会った先々で、米国や第33救難中隊が提供した援助に対しての日本人からの感謝の気持ちを受け感激しました」とのことです。

第353特殊作戦群は、横田基地から展開した救助作業を3週間にわたり行った後、4月4日、5日に帰還しました。震災前の3月上旬、同群は約350人の航空兵と6機のMC-130航空機を、韓国における訓練に参加させていましたが、3月11日の震災を受け、その訓練に参加していた半数の航空兵と3機のMC-130機を、横田基地に向け派遣しました。トモダチ作戦を支援している複数の組織に対して、同群の航空兵は彼らの専門的技術を提供したことです。のべ161回の航空機運用を行い、約40万キロの救難用物資を空輸し、534人の人員を搬送、約8万キログラムの燃料を届けました。横田基地では、多くの隊員が合同支援部隊の特殊作戦チームの中に配属され、日本政府を支援する作業に関わりました。また特殊な専門性を生かして、飛行場や様々な場所で、小班を構成し活動しました。特に、仙台空港再開のため、日本の関係者と緊密に作業をしたとのことです。再開後、同空港は北日本における救難作業のための拠点となりました。特殊作戦群の航空兵は、嘉手納基地に帰還するまで、同空港における運用支援を行いました。4月3日時点で、米国空軍の管制官が仙台空港にて、救難作業に携わる371人、100万キロ以上の救援物資、約6万リットルのガソリンとディーゼル燃料を空輸した250機以上の航空機の管制を行いました。「自衛隊と米軍の共同作業により、津波の影響で仙台空港を覆い尽くしていた海水、泥、残骸を取り除き、空港を再開することができました。トモダチ作戦期間中にあける、チームワークの成功の一つです」と、第353特殊作戦群司令官のロバート トス大佐は語りました。



(写真全て、米空軍：サラ・シュリラ兵長撮影)

### PART I

- 「トモダチ作戦」支援部隊、嘉手納基地へ帰還
- 米空軍ファーストレスポンダー（初期対応者）から見た東日本大震災
- アースウィーク（地球週間）
- 動物病院改築診療開始

### PART II

- SpotLIGHT! 日本人従業員の紹介
- 「沖縄市学びの旅と女性の翼の会」会員、嘉手納基地を視察
- 嘉手納弾薬庫での清明祭（シーミー）

### • CONTENTS





## 米空軍ファーストリスピンド（初期対応者）から見た東日本大震災

第18航空団広報局

2011年3月11日に発生した東日本大震災において、亡くなられた皆様に深い追悼の意をささげます。被災された方々に、心からお見舞い申し上げるとともに、被災地の一日も早い復興をお祈りします。救難支援に参加した第31救難中隊司令であるスティーブ・グッドマン中佐に被災地での支援活動についてお話を伺いました。

（以下本人著）それは、わずかな支援であったかもしれません。日本の本州で救助支援活動に関わった者として、それは貴重な、心震える体験でした。ハリケーン・カトリーナの衝撃を経験しているアメリカ人の一人として、今回、日本の人々が受けた苦しみを理解し、出来る限りの手助けをしたいという思いを抱きながら現地へ赴きました。この1週間の任務を終え、すべての救難隊員（第31、第33救難中隊、第320特殊戦術中隊）も私と意を同じくしていると思いますが、もっと多くの救難活動ができたのではないかという思いがあります。

圧倒的な惨状を目の当たりにしながらも、その全てが希望を失わせることばかりではありませんでした。大惨事を放映するニュース映像ではとらえる事のできない、眞の意味での厳肅さが本州の海岸沿いにありました。被災地は悲惨な状況でした。しかし、印象深く感じたことは、災害直後から日本人の人々が適切な行動をとっていたということです。被災者の立ち直ろうとする力、そして人々の組織力です。それは模範ともいえる姿で、彼らの困難に立ち向かいながら、救難支援を受け入れる姿勢は、誇るべきものです。

3月13日の午後、私は津波被害の最も大きかった地域上空を飛行しました。日本側の支援要請の合図とともに、我々救難隊は救助に必要な出来る限りの、そしてどの様な活動も行うという意思のもと、救助へ向かいました。しかし、我々米国人のハリケーン・カトリーナから学んだ想定は今回の震災支援においては機能しませんでした。疑う余地もなく二つの壊滅的な災害は類似している所はあっても、今回の救難任務は異なるものとなつたのです。

我々が、「搜索・救助を必要とする孤立した被災者」の現場にたどり着いた時、既に人々は「救済が必要な避難者」となってありました。日本人は自ら状況を見極め、グループ（それぞれ100名から300名の単位で）に分かれ避難所に集まり、食料や飲料水などの必要物資を辛抱強く待っていました。略奪行為や、我先にと列を乱す者も無く、無私無欲だけがそこにあり、誰一人として、自分を救難ヘリにより遠くへ運んでほしいと言い出す者や、安全で暖かい場所へ連れて行って欲しいと言い出す者はなく、彼等は多くの大切なものを失った絶望的な状況にも関わらず、落ち着いて行動していました。

その後数日間は悪天候のためヘリの飛行活動が妨げられ、けが（大腿骨骨折）を負った年配者一人を救い出すのみでした。被災地で我々のヘリに積んでいた水や物資などを降ろし、被災者が喜んでくれた燃料やタバコなども運びました。私がこの記事を書いている今この現在も、HH-60救難ヘリコプターは厳しい現場へできる限りの救済活動を行っています。我々救難隊員は皆、無我夢中で救難任務に没頭しました。ヘリを離陸させるたびに、どこかに生存者はいないか、と搜索も続けていました。

被災地での救難活動を踏まえ米国の搜索・救難任務を日本のそれと比較した際、その内容は幅広いものがありました。被災地では、何千人の被災者を被害のあった地域から後方の避難所へ移動させていました。自衛隊は多忙で、道路の障害物を取り除きインフラ復旧を急ぎ、不可能な任務とも思えるほどの瓦礫の山を目の前に生存者を搜索、救出するという作業を同時にこなしていました。しかも震災直後から、夜間、自衛隊の緊急救援車両と思われる何千もの点滅光を眼下に確認できました。多くの都道府県が被災地の至る所に救出の手を差し伸べてあり、その努力に感心するばかりです。

今回の救難活動において米国の支援は確かに顕著で、特に飛行場使用を再開させたり、艦船経由で陸上への物資輸送も可能にしました。しかし、最たる努力は、日本人自らの復興力にあると思います。我々も救助支援するという行動に誇りをもちその努力を継続するとともに、復興に対する日本人々の努力を認識すべきだと思います。



（米空軍：サミュエル・モーズ二等軍曹撮影）

## アースウィーク（地球週間）

第18航空団広報局



嘉手納基地では4月15日から23日までの期間、アースウィーク(地球週間)が開催されました。期間中、チーム嘉手納(嘉手納基地の全部隊)は環境保全活動への積極的な取り組みを推進し、多彩な催し物が行われました。4月22日(金)、嘉手納基地のマレックパークでは、アースウィークの一環として植樹が行われました。カデナミドルスクールのゼロクラブ（Zoological Environmental Research Opportunity-動物環境研究クラブ）の生徒17名によって、公園内に桜の木が植えられました。

また、同日ケニーパークでは、嘉手納町の宮城篤実前町長への在職中のご尽力と長年に渡る嘉手納基地との係わり合いに感謝と敬意を表し、公園内に桜の木を植える植樹式が行われました。宮城前町長は20年に渡り町長を務められ2011年2月に勇退されました。

た。第18航空団司令官ケン・ウィルズバッカ准将は挨拶の中で「宮城町長は在任中、町民のため論理的に物事を考えられ、大型航空機の洗機場移設や1996年に締結された騒音防止措置に取り組まれ、嘉手納外語塾を開校するなど多大なご尽力をされました。嘉手納基地との長年の協力関係に尽力された宮城町長への感謝の意として桜の若木を献呈いたします」と述べました。宮城前町長は「地球は人類と動植物にとってかけがえのない貴重な存在であり、人類ができる範囲で大切にすることが重要です。この機会に、私のために植樹式を開催頂き感謝しています。この20年間それぞれの司令官そして嘉手納基地関係者との沢山の思い出が詰まっています」と話されました。

### チーム嘉手納 2011年アースウィーク宣言

幸運にも、この美しい自然と海に囲まれた沖縄と共に暮らす機会に恵まれた私達は、たとえ沖縄での滞在期間が短くとも、豊かな自然を守る義務を共有します。そのことにより、人々はまっさらなビーチを歩き、青く透明な海を泳ぎ、手付かずの森林を歩き、これから先何年も瑞々しい風景を楽しむことができます。

今年の「地球週間」（アースウィーク）期間中、私たちは基地内外における様々なイベントを通じて環境保全活動を推進します。児童養護施設向けに状態の良い衣服を集めたり、植樹、基地内公園及び樹林地域の清掃、ハイキングを通じた沖縄の動植物についての学習、子供から大人まで参加できる環境意識向上プログラムの実施、そして地域住民との合同ビーチ清掃活動を実施します。これらの活動を通じて環境に対する責任と奉仕することの意義を高めます。

互いに助け合うことは、地域社会を考える源です。今年の地球週間のテーマは「地域社会は一つ」です。人々は共に働き一体となって動いてこそ変化をもたらすことができます。4月15日から23日まで開催される「地球週間」（アースウィーク）期間中、嘉手納チームは環境に対する意識向上・「地域社会は一つ」の種を播き、活動への積極的な参加を推奨します。



(写真全て、米空軍：ジョナサン・ステファン二等軍曹撮影)

(写真提供：チップ・スタイル氏)



## 動物病院改築診療開始

第18航空団広報局

嘉手納基地内にある動物治療施設が改築され、4月20日業務を開始しました。同施設は、陸軍が運営し、対象は主として米軍の軍用犬です。在沖空軍と在沖海兵隊の所有する50匹の軍用犬と、日本本土、グアム、ディエゴ ガルシアに駐留する米軍所有のおよそ150匹の軍用犬に対し高度な医療治療を提供することができる最新の動物病院です。また在沖米軍関係者が所有する9400匹以上のペットの治療も受け付けるとのことです。

Okinawa Veterinary Treatment Facility re-open on Kadena Air Base

